

大豆近況 VOL.149

団体会員
一般会員 各位
賛助会員
協賛企業

関係部署にご回覧ください。

--	--	--	--	--

令和3年4月6日
一般財団法人 全国豆腐連合会
代表理事 齊藤 靖弘
相談役 郷 和平

「大豆近況」をお届け致します。是非、ご活用下さい。

○北米産大豆

米国農務省より3月9日に発表された2020/2021年度の世界の大豆生産高予測は、パラグアイ・ボリビア・アルゼンチン産が減少したものの、それ以上にブラジル・インド・ロシア産が増加見込となり、前月比0.2%増の3億6,182万トンとなりました。また、需要量は増えたものの、期初在庫と生産高が上方修正されたことで期末在庫も前月比0.5%増の8,374万トンに上方修正されました。

米国産につきましては供給量・需要量共に前回据え置き(生産量は1億1,255万トン)となり、期末在庫も前回据え置きの327万トン(在庫率2.6%)となっております。また、カナダ産の生産量につきましても前回据え置きの635万トンとされております。

2021年産につきましては、現地3月31日の米国農務省からの米国産大豆の作付面積意向調査の発表を控え、前年産を上回る見方が強まっています。また農水省がこのほど公表した2月の海外食料需給レポートにおいて、カナダ農務農産食品省によれば2021年産カナダ産大豆の生産量は高い大豆価格に支えられ収穫面積が増加し、前年産よりも3.8%増の660万トンの見込とされています。ただし、両国とも生産が増えるのは大半が遺伝子組換え大豆であると考えられるため、非遺伝子組換え大豆の生産農家の確保においては引き続き厳しい状況にあると推測されます。

また、2020年産大豆の入船は徐々に増えてきてはおりますが、依然として北米産地からの船積遅れの状況は改善されておられません。2019年産大豆の国内在庫は減ってきている様子は見られるものの、2020年産大豆の在庫は少なく、今後2020年産への切替が本格化してくる時期においては注意が必要と思われれます。

3月のシカゴ相場は期近限月で14.00ドル付近から始まりました。南米の天候不順による減産懸念や依然として続く米国の低水準在庫による需給ひっ迫感から買いが進み14.40ドルまで上がる動きを見せました。その後は南米産地での天候回復予報による作柄改善の

見込や、現地 31 日に発表の米国産の作付面積が昨年を大幅に上回る見方が強まったことで投機筋の売りが進んだことなどから、現地 3 月 30 日現在では 13.70 ドル付近で推移しております。

また、為替相場は 1 ドル=106.50 円付近から始まりました。米国政府による経済対策や新型コロナウイルスのワクチンの普及が加速していることで米国内での個人消費の増加や景気回復の期待が膨らみ、長期金利が上昇を続けたことで日米金利差の拡大期待からドル買いが進んだこと、欧州での変異型ウイルスの感染拡大による経済回復の鈍化懸念からユーロや英ポンドに対してドルが買われ円売りにも波及したことから、3 月を通して概ね一本調子で円安に進み 110 円を突破、3 月 31 日現在では 1 ドル=111 円に迫る動きとなっております。

○国産大豆

令和 2 年産国産大豆の第 4 回入札が 3 月 17 日に行われ、一部地域を除き全国的に約 5,200 トンが上場されました。落札平均価格は、普通大豆：¥11,600/60kg(前月比+¥12)、特定加工用：¥11,019/60 kg(前月比+¥796)、全体：¥11,425/60kg(前月比+¥182)となりました。落札率は約 83%となり、前回の約 77%と比べて上がっており、高い水準を維持しております。普通大豆(等級品)につきましては納豆用銘柄等一部の北海道産銘柄と府県産のその他(小粒)銘柄の一部を除き 100%が落札、特定加工用大豆についても北海道産の一部と府県産のその他(小粒)銘柄の一部を除き 100%の落札率となっております。

3 月の入札では、北海道産とよまさり銘柄及び府県産の各銘柄の落札率は依然として高いものの、落札価格については銘柄によって上下の動きにバラつきが出ています。価格の上昇に耐えきれず入札価格が抑えられたことや、比較的安価な中・小粒や特定加工用に札が集まり価格を押し上げている可能性などが考えられます。

4 月も 1 回の入札取引が予定されており、約 5,000 トンが上場される見込となっております。令和 2 年産国産大豆の入札取引も折返し地点を迎えますが、やはり冷静な対応が望まれる状況にあります。

以上